十九世紀の朝鮮半島版角筆文献

――朝鮮半島における漢文読と角筆の返読線――

柚木靖史

はじめに

本稿では、韓国の露店で見出した、朝鮮半島版角筆文献[注1]を精査した結果、十九世紀の朝鮮半島において、角筆で書き入れられた返読線が重要な働きを果たしていたことが分かったので、そのことについて報告する。韓国からは、近年、多数の角筆文献が発見され、その研究成果も報告されつつある[注2]。しかしながら、朝鮮半島の角筆文献については、まだ未解決の部分が多い。特に、十九世紀頃に印刷、出版された文献には、多量の角筆文献が存するはずであり、その発見とそれらの資料に基づいた研究が急がれる。十九世紀の角筆文献が、多量に発見されれば、朝鮮語の歴史的研究、地域別の研究をはじめ、多方面の研究にとって、貴重な資料となるはずである。

さて、今回、報告する角筆文献からは、詳密な、角筆による漢文の返読線の書き入れが見つかった。この返読線をたどっていくと、朝鮮半島における当時の漢文の読み方が、ほぼ完全に復元できる。角筆は、十九世紀の、朝鮮半島の漢文読において重要な役割を果たしていた。

本稿では、本資料の角筆の解読結果をもとに、朝鮮半島における漢文の読み方と、日本における漢文の読み方とを比較してもみたい。

一　架蔵朝鮮版角筆文献「孟子」の紹介

一・一　発見の経緯

二〇〇三年九月二十日（土曜日）、日本語教育実習生を引率し、ソウルの街を案内していたところ、路上で古書を山積みにして販売している店を見つけた。文献の装丁からして、売られている文献の多くは、十九世紀頃の板本であると知れた。角筆調査で学生を待たせるわけにも行かず、またあいにく悪天候で角筆調査に適さない天候でもあったため、角筆の書き入れの有無を確認できないまま、とりあえず、古書を一冊だけ購入することにした。多量の古書の中から選んだのは、「孟子」であった。すでに、淑明女子大學校図書館で「孟子」から角筆の書き入れを見出していたこともあり[注3]、また、朝鮮半島と儒教との関わりの深さを考えると、角筆が書き入れられていることが最も期待できる本であると考えたからである。

帰国後、角筆スコープで「孟子」の紙面を照らしてみると、予想通り、角筆の書き入れが認められた。最初の頁から最後の頁まで、実に詳密に角筆の線が書き入れられていたのである。線の他にも、口訣文字[注4]が、角筆によって書き入れられていた。口訣文字は、墨書

きもされていたが、角筆による口訣文字も書き入れられていた。角筆による口訣文字は、墨書の口訣文字の書き入れに添うように書き入れられているが、角筆単独で書き入れられている箇所もある。

角筆の線は浅くかつ細い線であったため、非常に読みにくく、はじめのうちは角筆の解読を躊躇したが、解読できないこともないと考え、一頁ずつ丁寧に角筆を読み進めていった。全頁の調査には、かなりの日数を要したが、その結果、この本には最初の頁から最後の頁まで、実に厳密に角筆が書き入れられていることが分かった。尚、本書は、「孟子」の本文と、その注解とから成っているが、角筆の解読を進めたのは本文のみである。注解の部分にも、角筆の書き入れが存在することを確認している。

一・二　書肆的事項

架蔵の朝鮮半島版角筆文献の書誌的事項を示す。

（外題・直・墨書）孟子大全　一冊
（内題）孟子集註大全
（刊記）なし　（時代）十九世紀初頭（推）
（装丁）袋綴装
（寸法）縦33・0糎×横23・0糎
（行数）10行　（字数）22字
（書き入れの有無）墨書による口訣文字の書き入れあり。他に角筆の書き入れ（符号、線、口訣文字）あり。角筆が墨書きより先に書き入れられている。
（表紙色）茶

また、表紙見返しには、次のように墨書きされている。しかし、この書き入れからは、本書が印刷された、正確な年代、場所、墨書や角筆を書き入れた人物は特定できない。

（表紙見返し・墨書）
告子杞柳篇
春定事保隠□□
一夜相逢□□□

（後表紙見返・墨書）
雪淡風軽止　千之得心
植柳遍教心　傳人而識
閑心和収得倫　一月癸卯
之年

章数　公孫廿三勝十五
蜕婁六一告三六

雪淡風軽
雪淡

正月初七日　癸

校監（別筆にて「校監」と重書）

紅裳□
半生□謂不合

「二十月五日開学
元年初」

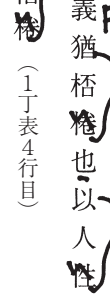
（「　」の部分は、別筆墨書。□は、虫損や印刷の擦れで、文字が判読できない箇所。）

二　架蔵朝鮮半島版「孟子」に書き入れられた角筆

二・一　角筆による返読線

先にも述べたように、本書には、角筆により、線や符号、さらには文字が書き入れられている。このうち、文字は、漢文の読み方を示す、口訣文字である。口訣文字は、角筆のほかに墨でも書き入れられている。

本稿で、特に取り上げたいのは、角筆で書かれた線や符号である。解読を進めた当初、この角筆線が、何を示すものなのか、分からなかった。しかし、解読を進めるにつれ、その線が、漢文を読むための、返読線であることが分かってきた。漢字の真ん中に書き入れられた「ᔕ」のような鉤状の符号と組み合わせて読んでいくと、本文をどのような順序で読んでいったかが復元できることが分かったのである。例えば、次のようである。



（1丁表4行目）

（符号の解説）「曰」の右下に下に続くことを示す二重線あり。「性」の右下の口訣文字は、主格を表す。「柳」の中央にある鉤状の符号は、上に返る起点を表す。「柳」から「猶」まで上に返読線が伸びる。「也」の下に区切り符号あり。「義」の右下に、主格を表す口訣文字。「棬」の中央に上に返る起点を表す鉤状の符号。そこから「猶」に返読線が延びる。「性」の中央に起点を表す符合、そこから上の「以」に返読線が延びる。「義」の中央に起点を表す符合。そこから「為」まで返読線。「義」の右下に、主格を表す口訣文字。「柳」の中央に起点を表す符合。そこから上の「以」まで返読線が延びる。「棬」の中央部に起点を表す符合。そこから上の「為」まで返読線が延び、その「為」には中央に鉤状の符合があり、そこから上の「猶」まで、さらに返読線が延びる。以上をまとめると、次のような順番で読むことになる。これは、後に掲げる日本語の読みをみても分かるように、日本の漢文の読む順序と同じである。ただ、後にも述べるが、「猶」は再読されていない。

（朝鮮語として読む漢字の順番）告子曰性紀柳猶也義梧棬猶也人性以仁義為杞柳以梧棬為猶

（日本読み）告子曰（ハク）、性（ハ）猶紀柳（ノゴトシ）〔猶〕也（不読）。義（ハ）猶梧棬（ノゴトシ）〔猶〕也（不読）。人（ノ）性（ヲ）以（テ）仁義（ト）為（スハ）猶杞柳（ヲ）以（テ）梧棬（ト）為（スガゴトシ）〔猶〕

なお、角筆による返読線は、返読の起点となる漢字の左下、もしくは右下から始まり、着点となる漢字の左下、もしくは右下まで、途中とぎれることなく引かれている。返読線を本文の右に書くか左に書くかということは、定まっていない。本文の中央を通って、右から左へ、左から右へ移る場合もある。

・孟子曰乃若其情則可以為善矣乃所謂善也

（告子上　11丁裏6行目）

・如使人之所欲莫甚於生

（告子上　28丁裏4行目）

二・二　角筆による返読以外の線

本書には、返読線のほかに、次のような書入れがみられる。

①下にそのまま続けて読むことを示す線

これは、次のように漢字の右下に二本線で示す。

・公都子曰冬日則飲湯夏日則飲水然則飲食亦在外也

（告子上　10丁表4行目）

②合符（熟語であることを示す）

熟語の上の漢字と下の漢字の間の、中央、左寄り、右寄りとあり、位置が一定しない。また、熟語の左または右に、横に線で括弧をつける場合もある。

・孟子曰拱把之桐梓人苟欲生之皆知所以養之者至於身而不知所以養之者豈愛身不若桐梓哉非思甚也

（告子上　35丁表10行目）

③固有名詞を示す長方形状の線

これは、次のように、熟語の中央を縦長に貫いて書かれる。

・孟子曰舜発於迮畝之中傅說挙於版築之間膠鬲挙於魚鹽之中管夷吾挙於士孫叔敖挙於海百里奚挙於市

（告子下　25丁裏3行目）

④連体格を示す符号

「儿」形の符号が、当該漢字の中心に書かれる。

・吾之於味有同耆也易牙先得我口之所耆者也

（告子上　19丁表4行目）

⑤主格を示す符号

「〇」形の符号が、当該漢字の中心に書かれる。

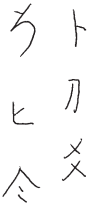
・惻隱之心皆有之羞悪之心皆有之恭敬之心皆有之是非之心

（告子上　13丁表6行目）

二・三　角筆による口訣文字

口訣文字は、墨書きのほかに角筆でも書かれている。口訣文字の字種は、墨の方が多い。墨書の口訣文字と角筆の口訣文字とが一致する場合もあるが、墨の口訣文字だけで角筆の口訣文字の無い箇所、逆に角筆の口訣文字だけで墨の口訣文字の無い箇所、墨の口訣文字と角筆の口訣文字がともに存するものの文字が異なる箇所もある。角筆では、「ᴾ」（主格）と「ᶜ」（文末）という口訣文字が多用される。

〔角筆で書かれた口訣文字の主な例〕



三　日本における漢文訓読との比較

三・一　返読符号の形状の違い

日本の漢文訓読の返読は、一二点、レ点、上中下点等の返り点によって示される。これに対して、朝鮮半島版角筆文献の返読は、線や起点を表す鉤状の符号、加えて口訣文字によって示される。日本の訓点資料において、朝鮮半島版角筆文献のように、返線で返読を記した資料を、いまだ私は知らない。

三・二　返読符号の筆記方法の違い

日本における江戸時代の板本では、訓点附刻本といわれるように、返読符号が印刷されることが多い。写本では、返読符号が墨書きされる。まれに、角筆で、返読符号が書かれることもある。角筆は、印刷上の擦れによって、返読符号が不鮮明な場合や、印刷による返読符号の位置を改める場合などに使われる。

これに対して、朝鮮半島の版本における返読は、主として角筆で書き入れられる。漢文に返読法を示す口訣文字が墨書きされた文献は存するものの、印刷された本文に、墨で黒々と返読線を書き入れた文献を、筆者はいまだに韓国での調査の折に、見たことがない。

三・三　返読方法の違い

① 朝鮮半島版「孟子」と、日本版「孟子」の読み方を、返読の仕方という点から比較すると、漢字の読み順が一致することが分かった。なお、現代の朝鮮語と日本語の文を比べてみても、文の文法的構造は同じなので、十九世紀において、漢文の読み順が一致しても不思議ではない。

② 日本で再読されることのある「猶」「将」「未」は、朝鮮半島版角筆文献では再読されていない。いずれの字も、副詞ではなく助動詞相当の語として読まれている。

「猶」

・性猶湍水也（告子上　2丁表8行目）

・猶水之就下也（告子上　2丁裏5行目）

・猶是也　（告子上　2丁裏10行目）

・猶白雪之白　（告子上　4丁裏8行目）

「将」

・将至思援弓繳而射之　（告子上　26丁裏10行目）

・我将見楚王説而能之　（告子下　8丁表3行目）

・将見秦王説而罷之　（告子下　8丁表3行目）

・曰我将言其不利也　（告子下　8丁表9行目）

「未」

・未有能生者也　（告子上　26丁表9行目）

・未加於上　（告子下　11丁表2行目）

・禮貌未衰　（告子下　24丁表6行目）

・雖未行其言也　（告子下　24丁表10行目）

③「所謂」「所以」は、返読せず、熟語として読む。

「所謂」「所以」は、日本ではそれぞれ「いわゆる」「ゆえん」と、二字を合わせて読むことが多い。ただし、これらは、「謂ふ所」「以って～するところ」のように、二字を分けて、下から返って読むことも可能である。朝鮮半島版においても、日本と同じように、「所謂」「所以」を、二字合わせて読んでいる。

「所謂」

・乃所謂善也　（告子上　11丁裏7行目）

・所謂良臣古之所謂民賊也　（告子下　19丁裏3行目）

「所以」

・其所以放其良心者　（告子上　21丁表8行目）

・所以考其善不善者　（告子上　35丁裏9行目）

・所以不願人之膏粱之味也　（告子上　40丁裏8行目）

・所以不願人之交繡也　（告子上　40丁裏9行目）

④「以爲」は、日本と同様、熟語の場合と、返読する場合とがある。

日本において、「以爲」は、「おもへらく」と、二字を合わせて読む場合と、「以って～と為」と二字を分けて読む場合とがある。朝鮮半島版でも、二字を合わせて読む例と、二字を分けて読む例とが存する。

［二字合わせて読む例］

・子以爲有王者作則魯在所損乎在所益乎（告子下　18丁裏5行目）

［二字を分けて読む例］

・則可以爲魯矣（告子上　11丁裏6行目）

④「奚爲」は、朝鮮半島版角筆文献では、「奚～爲」と、下から返って読む。

「奚爲」は、日本では二字を合わせて、「ナンスレゾ～」と読むこともあるが、朝鮮半島版では、「奚～爲」のように下から返って、二字を分けて読む。

・然則奚爲魯而不寐（告子下　23丁表4行目）

おわりに

今回は、韓国で見出した、朝鮮半島版角筆文献「孟子」について、角筆の解読作業結果から分かったことを述べた。朝鮮半島で十九世紀に印刷された版本には、一見、何も書かれていないところに、角筆によって重要な情報が記されている。今後、その観点からの、再調査が必要である。

今回取り上げた文献では、角筆の線や符号により、十九世紀の漢籍の返読の仕方を復元することができた。今後、このような角筆文献が発見されれば、朝鮮語の歴史的研究の資料となるであろう。朝鮮半島において、現存する十九世紀頃の版本の多さを考えると、今後、角筆文献が次々に発見される可能性は高い。

朝鮮半島における十九世紀の漢文読には、角筆が重要な役割を果たしていた。朝鮮半島における漢文読は、墨によって書き入れられた口訣文字だけではなく、角筆による返読線や鉤状の符合、下に続くことを示す二重線、さらには口訣文字などが重要な働きを示していた。

ただし、これは、今回見出した、一文献のみからの考察である。今後、同じような角筆文献を見出していかなければならない。朝鮮半島では、かつて、漢文は音読されていたという。しかし、今回見出された文献も示すように、朝鮮語風に漢文を読むこともあったことが知られる。中国風の音読が中心であれば、墨の文字で黒々と、読み順を示すわけには行かなかったであろう。その点、色をつけず、目立たない角筆は、読みを記録するのに便利だったはずである。もしそうだとすると、今後、同じような角筆文献が発見される可能性は高い。このような角筆文献が多く発見されれば、朝鮮語の歴史的研究に大いに資することになる。

十一世紀朝鮮半島版の角筆文献について、小林芳規博士は、角筆

の返読符について、「返讀する箇所に常に施されるわけではなく、必要に応じて施されている」[注6]と指摘する。それに対して、今回取り上げた角筆文献は、全頁に亘って、詳細に返読線が書かれており、鉤状の符号やその他の線や符号との組み合わせにより、どういう順番で漢字を読んでいったかを復元できる。返読線の形状も、途中で線が途切れない点など、十一世紀の角筆文献とは、異なるところも多い。これらの違いが、時代差によるものなのか、今後、明らかにしていく必要がある。

漢籍についていえば、朝鮮半島の版本には、墨の書入れが日本に比べて少ない。漢籍はかつて、中国風に音読されていたから、墨の書き入れも少なかったのだという人も多い。しかし、角筆という視点をそこに加えていくと、朝鮮半島の版本は、一転、重要な言語上の情報を提供してくれる貴重な資料群となる。今後、筆者も、機会を見つけ、韓国における角筆調査を重ね、本書で紹介したような角筆の書き入れのある、第二、第三の角筆文献の発見に努めたい。

（注1）　ここで、朝鮮半島版角筆文献という用語を使ったのは、朝鮮半島において、十九世紀は激動の時代であり、十九世紀末には、李氏朝鮮から大韓民国に変わる。したがって、ここでは、特定の国名を避け、朝鮮半島版とした。本稿で取り上げる「孟子」が、正確にいつ、どこで印刷されたかは、刊記や墨書きからは、判明しない。

（注2）　韓国における角筆文献の発見、研究については、小林芳規博士を中心に進められてきた。論文は、「韓国遺存の角筆文献調査報告」（『訓点語と訓点資料』第一〇七輯、二〇〇一年）、「韓国における角筆文献の発見とその意義―日本古訓点との関係―」（『朝鮮学報』第百八十二輯、二〇〇二年）など、多数の論文があり、著書では、『角筆文献研究導論　上巻　東アジア篇』（汲古書院、二〇〇四年）に詳しい。また、韓国でも口訣学会所属の研究者を中心に、角筆研究が鋭意続けられている。

（注3）　筆者が韓国で見出した角筆文献については、「淑明女子大学校図書館蔵の韓国十九世紀の角筆文献―発見の意義と今後の課題―」（『小林芳規博士喜寿記念　国語学論集』　汲古書院　平成十八年）を参照のこと。

（注4）　口訣とは、漢文を朝鮮語で読むための補助符号で、漢文の傍らに付される。漢字の部首などから成立したといわれる。

（注5）　当該文献の印刷年代については、朝鮮半島における版本に詳しい複数の方々に見ていただいた結果、十九世紀初頭に、朝鮮半島で印刷されたものに間違いないとのことであった。私も、韓国各所の大学で、刊記のある版本を多く見てきたが、それらと照らし合わせても、本書が十九世紀初頭に印刷されたものであると判断している。

（注6）　小林芳規著『角筆文献研究導論　上巻　東アジア篇』（汲古書院、二〇〇四年）「第二章　朝鮮半島の角筆文献　一四一頁～一四六頁」を参照のこと。

（ゆのき・やすし）